



第72号  
平成20年(2008)  
7月16日発行  
(年4回発行)

## 連句作品は誰のものか

青木秀樹

このテーマについて東明雅先生が「猫蓑通信」第2号(平成三年一月十五日発行)の巻頭に書かれた一文がある。その冒頭部分は、「連句という文学の特性については、まだ誤解されているところが多い。たとえば、連句は座の文学である、だから出来上がった作品はすべて一座した連衆のものであり、それが個の文学でなく、衆の文学である所以であると簡単に思い込んでいる人がいる。これはとんでもない誤解である。」

そして結論として「捌き手のついた作品は、連衆が何人いようと、またどんなえらい人がいようと、その作品は捌き手のものであり、決して連衆のものにはならない。従って衆の作品ではなく、個の作品である。厳密に言えば、衆を楽しませた個の作品ということになるのか。」と結ばれている。

その理由としておおよそ以下のようになっている。連句の座では、捌き手が一卷全体の構成を考え、連衆から出された一句一句を吟味・添削しながら選択し、付け句を治定する。一卷の進行に合わせて序破急を考え、差合や去嫌に注意し、前句への付味だけでなく、打越からの転じ、人情の自他場、景の内外、句材の変化などを考慮しながら一句を治定する。連衆から出されたいくつもの句のなかからどの句を選ぶかは捌き手の権限であり、責任である。選ぶ句が違えばそこから先の展開は別物になり全く違う作品ができあがる。

ところで、あまり芳しい話ではないが、二年前の六月、俳句と連句を並立しているある結社の主宰から「破門・除名」の通知をいただいた。内容は、その結社に属するそろそろ中堅になるうかという男性が、自選俳句集と連句集を私家版として刊行したことが原因で、主宰の逆鱗に触れたというものである。俳句集は個の文学であるから容認されたものの、連句集に結社の主宰および結社の先輩捌き手の作品を、無断で捌き名や初出の表記なしで、あたかも本人が捌いた作品であるかのように掲載している。それで結社同人の同意を得て除名したというものであった。縁あって、除名された本人に電話で確認したところ「連衆にも応分の権利がある」と抗弁し、自己の誤りを認めない態度であった。このような連句についての基本的な教養がなく、自己顕示欲

が洋服をきているような人物のことはさておき、連句作品の一句一句の作者がそれなりの著作権を有するものなのかどうか。

アメリカ合衆国型の権利主義は伝統的な文芸、特に連句には不似合いのものであろう。連句作品は連衆からの出句を捌きが選択し編集したものであり、そのハーモニーで出来上がっているものである。

ある出版社が連句作品の中から、花の句・月の句・恋の句を取り出して、一冊の本を作ろうとしている。一句一句独立した文学作品である俳句と違い、連句作品の中の一句を取り出して「独立した一句」として扱うことは、それぞれの一句に独立した「応分の権利」があるものとして認めることになるのではないだろうか。

このところ国民文化祭の募吟の選をしていて感じる点がある。初心者と思われる方の作品は平凡な発想の付け句が多く、見るべき作品になっていないこと、もう少し進んで入選を望むクラスの方の一部には「どこかで見ただことのある」目立つ良い句をそのまま少し改作して取り込んでいることに特徴がある。俳諧の世界では古の句歌を面影にした句は認められているとは言え、盗作に近い類句・類想の句は感心しない。連句作品をバラ売りして、一句ごとに「応分の権利がある」ことを認めることは、「真似句」を助長することにならないかと危惧している。

## 連句作品は誰のものか

東 明雅

連句という文学の特性については、まだ誤解されているところが多い。たとえば、連句は座の文学である。だから出来上った作品はすべて一座の連衆のものであり、それが個の文学でなく、衆の文学である所以であると簡単に思い込んでいる人がいる。これはとんでもない誤解である。

尤も、連句には捌きなしの膝送りというやり方がある。これは一座に特別の捌き手を作らず、一座の連衆が協同してそれぞれ前句を受けて付句を考え、次の人も同じような作業をしてまた次の人にまわす。こうして何人かの連衆がそれぞれに、一卷の序・破・急を考え、付味・転じを考えて、一卷を首尾するものである。だから、この方法による一卷は、文字通り連衆全部の作品でありその意味で個の文学ではなく、衆の文学であると言つてよいだろう。

それに反し、宗匠あるいは一座で選ばれた練達の捌き手が、一卷全体の構成を考え、連衆の作った一句一句を吟味・添削しながら進行させるのである。彼は藤元に集まる数多くの投句を、一卷の進行に併せて序・破・急を考え、差合や去嫌に注意し、前句への付味だ

けではなく、打越からの転じ、人情の自他、景の内外、その他、それまでの各人の出句数なども考慮して一つを選ばねばならない。その作業は極めて難しく、一句の選択を誤ればたちまち一卷が無になる。一座の興もなくなる。全く千仞の谿の上を綱渡りするような、緊張の連続である。

捌き手のこの苦勞にくらべて、一座の連衆は、各自それぞれに一卷の進行を考えて句を出しているものの、それを採用するか否かはすべて捌き手に一任されているので、直接の責任はない。気が楽であり、楽しみはあるけれども苦しみはない。

それで、捌き手のついた作品は、連衆は何人いようと、またどんなえらい人がいようと、その作品は捌き手のものであり、決して連衆のものにはならない。従つて衆の作品ではなく、個の作品である。厳密に言えば、衆を楽しませた個の作品ということになるか。

「ねこみの」第二号より転載

## 連衆心の復活

東 明雅

近頃の連句の新らしい傾向は、連衆がそれぞれ、自分の句の新らしさを競い、奇を衒つて、他人が理解しようがしまいが、前句に付

こうが付くまいが、そんなことは知ったことではないという作品が多すぎるように思えます。また、句上げの数を競つて、多いのを誇りにし、月や花の句を他人に譲る心を失い、初心の人を助け導く優しさもなく、要するに座の文学たる連句に取つて最も大切な連衆心を失った作品も多く、それでは座の文学としての本当の連句は亡びてしまう外ありません。

連衆は、お互いに前後の人、前後の句、また一座の人、一卷の序、破、急、調子をよく考えて付け進むことが必要です。それで、一卷が滑らかに進行し、珠がころんで、全体としての味が生まれてくるのです。

これには、「膝送り」の方法が良いと考えられます。「出勝」だと、どうしても他人より多く出句しよう、他人よりすばらしい句を出そうという競争心が連衆心を失わせ、これが一座の落ち着いた気分を乱し、結果として一卷の中にまとまった風韻を醸し出すことを拒むのです。

芭蕉の作品集「冬の日」「猿蓑」「炭俵」など、それぞれの作品の中に「風狂」「さび・しおり」「軽み」などの風韻が流れ、それが芭蕉の芸術性を醸し出しているが、それらはすべて「膝送り」の方法で作られたものである事を思い出すべきでしょう。

「ねこみの」第四〇号より転載

猫養会平成二十年度正式俳諧配役

第二十二回藤祭奉納  
俳諧の連歌二十韻

太夫の教養

鈴木千恵子

宗匠 橋 文子

和の心持ち寄ってゐる藤祭

秀樹

脇宗匠 近藤 守男

雅楽の調べ運ぶ軟東風

守男

副宗匠 久保田庸子

しゃばん玉七色に世を廻すらむ  
嬰の小爪のふつくらと浮く

庸子

執筆 鈴木千恵子

ウ  
オリオン座迎へ見送る織き月  
ダツフルコート包む片恋

了斎

知司 鈴木 了斎

秘め事となるもならぬも君次第

末悠

副知司 秋山志世子

黄金埋めた海賊の島  
信天翁風切羽の白帆めく

雅子

座配 遠藤 央子

小学唱歌口衝いて出る

恭子

座見 永田 吉文

ナオ打水を打って老舗の門を開け  
マスクメロンの網は密なり

美友紀

花司 横山 わこ

美人記者スクープで取る社長賞  
酌み交す古酒果ては媚薬と

常義

配硯 棚町 未悠

月の闇やごとき血を狂はせて  
鬼の捨子のゆれてゐる影

吉文

同 内田 遊民

ナウ軽業師故郷の山が逆立ちに  
なくしたものを取り戻す旅

志世子

老長 原田 千町

球場の応援合戦花ふぶく  
レトリバーの背暖かな午後

文人

(実技指導 臥猫庵千町宗匠)

執筆

江戸の太夫の教養に憧れていた。太夫は「茶の湯・和歌・俳諧・書道・生花・三味線・琴などの諸芸に秀でていなければならなかった」という(『西鶴辞典』)。

ところが、執筆という大役にも諸芸が必要なこと気がついた。幸い、お菓子が食べたくて始めたお茶の経験は、道具を扱うという点において大変役立った。俳諧はともかく真摯に取り組むしかないのであるが……。書道はもちろん、懐紙に句を認めるのに必須である。生花の心得は花司を務めるのに必要であった。そのときもお茶の先生に泣きついた。三味線・琴などの音曲物は私のもっとも苦手とするところである。吟声のために能楽教室に通われた方もいらした。自分はこの仕事柄が大きな声を出すのはさほど苦ではない、それだけを頼りに乗り切った気がする。

女性の身につけるべき教養には「絵書花結」という用語もある。絵心もかなり無いが、それは置いておいて。「花結」どころか、懐紙の綴じ合せに水引を結ぶ。それだけのことがとても難しいのである。何とか形をつけなくてはと緊張するあまり、懐紙に錐で穴を開けるのを忘れていた。

こんな粗忽な私だが、文子宗匠始め皆様のお蔭で無事執筆を終えることができた。明雅先生、猫養の格子女郎くらいにはなれますか？

二十韻 「放生池」 上月淳子 捌

二十韻 「黙考」 峯田政志 捌

二十韻 「大宰府の風」 佐古英子 捌

亀泳ぐ放生池や藤祭 淳子

藤波に黙考の亀動かざり 政志

大宰府の風おとなふや藤祭 英子

笙の調べも暮れかぬる頃 佳之子

反り橋渡る春着春傘 碧

笙篳篥の響きうららか 久美子

炉の名残親しきばかり集ひゐて 達子

厨には芹刻む香のたちこめて 央子

春の茶事留学生を半東に 弘子

甘党辛党好きなピーナツ 泉子

トランプゲーム熱中の子ら 郁子

言葉つきつぎ興ず尻取り 吉文

行商へ上総の月に見送られ 了齋

月涼し洋琴の音の響きをり 良重

付きが来てねばるパチンコ冬の月 守男

葡萄のやうな小さきくちびる 泉

玉巻く芭蕉肩を叩かれ 郁

寒さものは見せる超ミニ 久

睦まじく零余子も負ける子沢山 齋

真顔なる愛の言葉は仏蘭西語 同

子づくりに姑すすめる温泉郷 守

希望はせぬに希望退職 之

聖火の移動きはむ困難 碧

音信不通すでに十年 弘

元校長蒔蓄垂れて泡吹いて 泉

新しいドーム雨漏りしてゐます 央

メキシコのTAROの壁画甦る 久

屑の金魚はアロワナの餌 齋

コンビニで買ふ白い雑巾 重

かつと見開く不動明王 同

ナオ大夕立アンデス山中九十九折り 之

ナオ一升瓶ぐびぐびあけて河豚汁 央

お忍びのうづら金時かき氷 守

声甲高く唄ふ芸人 達

語り尽せぬ冬の立山 重

酔ひしれて睦言ばかりきりもなく 久

颯爽と俣の走る木挽町 齋

独房へ毎日届く落語本 碧

おどける夫の夜這星だよ 弘

月明の下掛取に行く 泉

門火焚いても君は来まさぬ 央

月なほ暖木犀の香を漂はせ 吉

遠距離の恋のつらさよクリスマス 齋

盲目の妻を愛しむ夜半の月 同

満員御礼虫を聴く会 弘

時間惜しくてもう酔ったふり 之

遠く幽かに鹿の鳴く声 郁

ナウつひに来た後期高齢誕生日 守

ナウ踏み外す一歩もなく古希となる 泉

ナウ広重の描く旅路を辿りつつ 碧

無理が通れば聖火しらける 吉

沖にくつきり望郷の鳥 齋

畦焼く軀背を丸めて 重

列をなす言問団子花の昼 久

花吹雪輓馬のあとを追ふ子馬 達

夢かとも小彼岸桜花盛り 郁

雛納めして広きお座敷 弘

三角屋根に点す春灯 齋

若鮎上る清流の岸 重

※半東!!大寄せの茶会などの時給仕する役

連衆 染谷佳之 篠原達子 青木泉子

連衆 松本 碧 遠藤央子 東 郁子

連衆 副島久美子 松原弘子 永田吉文

鈴木了齋

伊藤良重

近藤守男

二十韻「紫藤の末葉」 高橋豊美 捌

二十韻「束帯」 秋山志世子 捌

二十韻「亀戸や」 青島ゆみを 捌

菅公五歳紫藤の末葉きらめきぬ 豊美

翻る禰宜の束帯藤香る 志世子

亀戸や藤にまとぬ江戸ことば ゆみを

お祓ひ受ける背に軟東風 文人

社殿の奥に春深む頃 鐵男

まつぐ抜けるあたたかき露地 路子

炬塞ぎの作法静かにすすめて 恭子

やつとかめ紋白蝶を絵手紙に 葵

大掃除少年ひとり懸命に 哲子

ネット検索行列の店 美友紀

名刺交換肩書きはなし 孝子

アコステイックのギター別格 美奈子

水槽の金魚に月の皓々と 弘子

月光のゆらめき受けん新走り 孝

寒月に摩天楼群背比べ 遊民

手も握らずにをぢさまの恋 紀

S.Lで行くみちのくの秋 男

野良の蒲団はつもる落葉よ 睦子

この愛は有効期限切れてます 恭

黒塚に籠めし恨みか紅葉燃ゆ 孝

あのダダと添ひ寝したいと家を出て 奈

タラップ降りて思ひ出の街 弘

水晶玉に笑ふあだ人 葵

愛の巡礼はや二十年 路

象の国ゼロの概念生み出しぬ 紀

それからの武蔵たこ焼屋を始め 男

故郷は遙か遠くの勃牙利<sup>アルカリ</sup> 哲

直通電話はいと総裁 恭

馬にまつはる損の焦げつき 孝

土俵の白星父と母とに 民

ナオかくれんぼ兄は炬燵に身を潜め 人

ナオ明早し勤行の声ひびき合ふ 要

ナオ編蛇に新派女形の匂ひあり 哲

石焼芋をほつくりと割る 恭

凜々と聞く胸の風鈴 同

なぞなぞになる政治家の言 睦

スカートのもも厳しく女学生 人

一瞬の化学反応恋に落ち 葵

五六冊まとめて売った秘蔵本 奈

蠶螂のごと喰はれたき夫 紀

銃よりナイフ愛の美学は 孝

抱かれながら天の川見る を

秋遍路痴話喧嘩する月の宿 人

影長く青いモスクに月は凍て 男

革命を砂糖菓子だと月に恋ひ 哲

竹伐る音のひびきくる闇 弘

すっぱん雑炊煮ゆる間の夢 要

南葛に呑む苦きどぶろく 奈

ナウけふもまたアールグレイのミルクテイ 恭

ナウ垣間見し土管の先の理想郷 葵

ナウ富弘の描く絵はやさしそへる詩も 路

亀の子たはし母に拝借 豊

自転車駆って保健師の来る 世

ゆつくり降りる竹の遮断機 睦

新入りの車掌点呼す花の雨 紀

井戸茶碗ゆたかに花の野点席 要

花万朶膝破れジーンズ闊歩して 民

朝寝の夢は東京の夢 恭

嬰兒の名に付けし若鮎 執筆

羊の毛刈る神父様なり 哲

連衆 二村文人 式田恭子 奥野美友紀

連衆 林 鐵男 石川 葵 坂本孝子

連衆 倉本路子 伊藤哲子 鈴木美奈子

市野沢弘子

山本要子

内田遊民 井上睦子

二十韻 「男橋女橋」

松島アンズ 捌

藤浪の男橋女橋を渡りけり

アンズ

春惜しみつつ筆塚に礼

昭

教室に虻飛び込みて総立ちに

暁巳

ジーンズの裾少しささくれ

良子

ウ 昼の月ゆるゆる連れる撒水車

未悠

箱庭作る小さき恋人

巳

寺裏の相合傘を冷やかされ

良

馬上凜凜しき義経の像

昭

モンゴルの大草原を翔ける夢

悠

財政再建るか成らぬか

昭

ナオ 天秤の針揺れてゐる冬の雷

巳

屋台で啜る葱の雑炊

悠

諸肌を脱いで立膝啖呵切り

良

イケメン刑事じつと張り込む

巳

クラインの壺より昇る望の月

昭

今年の酒はまこと上等

良

ナウ 猪道を辿りてゆけば隠れ里

悠

軀の咄絵巻物めく

昭

ぽっかりと花に見開く埴輪の目

良

口笛吹いて漕ぎしづらんこ

巳

連衆 松原 昭 島村暁巳 本屋良子

棚町未悠

二十韻 「神の朝」

横山わこ 捌

神の朝うすむらさきの藤祭

わこ

雅楽の調べいと麗か

千町

外国の浅蜷たつぷり汁にして

あや

二人一組寮の当番

有子

ウ 月冴える湖畔に波の静もれり

ジヨウ

近松忌とや誰ぞ恋しき

町

オートバイ情けの背なにしがみつく

や

リサイクル屋は大通り裏

同

鑑定で家宝の壺は贋と出る

有

哲学なんぞ夢のたわごと

町

ナオ 富士山も笠雲かぶるむし暑さ

ウ

あの人と知る香水はJOY

町

睦言のいつまで続くジャズ喫茶

ウ

牝鹿のように体震わす

有

暗がりには不安いっぱい居待月

や

秋の袴も矢鱈綺良し

わ

ナウ ペン回し技をネットで公開す

有

洋風地酒流行るCM

や

浅葱幕切つて落せり花の景

町

ビルの谷間に見ゆる初虹

有

連衆 原田千町 中林あや 佐々木有子

林ジヨウ

二十韻 「一筆書き」

根津忠史 捌

藤の池一筆書きに巡りけり

忠史

のどかに眠る大小の亀

庸子

春深むお宝鑑定人群れて

秀樹

プロマイド売る口上のよき

暢子

ウ そぞろ行く竹下通り月涼し

千恵子

日焼けの腕に腕を絡ませ

庸

恋すればつのる神経過敏性

樹

薬師如来のお留守なる寺

庸

十年分更新しようかバスポート

樹

自治を求めて蜂起する民

千

ナオ 仕掛けたる狐の罫に誰か落つ

庸

使い古したスケートの靴

史

イナバウワーベッドルームでポーズとり

千

何でも褒めてくれた元彼

樹

故郷の田毎の月を見に帰る

暢

謙信像に色変えぬ松

庸

ナウ 鬼やんま掴む子供の得意顔

千

退職校長昼の升酒

樹

数多ある花それぞれに枝垂れたる

庸

雲雀の上がる空の薄雲

暢

連衆 久保田庸子 青木秀樹 船水暢子

鈴木千恵子

二十韻「藤の房ある」 西田一枝 捌

池の面に藤の房ある社かな 一枝

亀も鳴くらん朱の橋の下 文子

子供らと団扇作りを習ひあて 明子

内ポケットにいつもメモ帳 かりん

凍月の路地にひそみて事件記者 常義

熱爛つけて風呂も沸かして 明

入籍はまだしたくない頃なれど 義

籠の鸚鵡の叫ぶジューム 文

海賊の死人の箱には十五人 義

空想力の足らぬ若者 ん

ナオ裁判員制度論じて門涼み 同

陶の枕に極楽の夢 文

細腰の嬬やかにしてチャイナ服 ん

マカオの女賭けるうそ寒 文

欠けるのはあつといふ間の十三夜 明

小豆洗ひは妖怪に似て 文

ナウ遠州流お手前さらふオフィスに ん

万事そつなき重役の秘書 義

自然食贅沢弁当花の山 文

春の眺羚羊の来る 明

※「宝島」ジョン・シルバーの歌う歌

連衆 橋 文子 野口明子 登坂かりん

生田日常義

正式俳諧奉納報告会直会

二十韻 「過去未来」

膝送り

過去未来渡る朱の橋梅は美に 上月淳子

緑ゆかしく滴れる池 原田千町

学際の協働成果あぐるらん 西田一枝

一番乗りの声の勇まし 佐古英子

七夕の月青々とはしゃぐ子等 秋山志世子

草庵の軒かすめ老蝶 青木秀樹

差し入れの御膳に添へる新走 松島アンズ

退屈しのぎちよつかいを出す 式田恭子

秘め事はあられもなくとめどなく 横山わこ

海外赴任残る若妻 根津忠史

ナオ三国志の壁もパンダも土砂の中 橋文子

覆面を取り月下再会 高橋豊美

火鉢置き本因坊の棋譜並べ 峯田政志

案件多くもめる議事堂 淳

握手の掌指こっそりと合図して 町

いとさん狂ふ禁断の恋 枝

ナウああしんど隙間を探す駐輪所 英

新人社員も客回りする 世

五百羅漢鎮もりてをり花の雨 樹

春泥べたと鳥の足跡 ズ

正式俳諧奉納報告会直会

二十韻 「藤若葉」

膝送り

風雨にも負けず社の藤若葉 文子

池の面かすめ夏燕飛ぶ 豊美

昼の酒デタントモード高まりて 政志

ピーナツの殻次々と剥く 淳子

おたいこに青く染めたる三日の月 千町

虫すだきをり遠州の庭 一枝

しつぱりと昔を今によび戻す 英子

触るれば熱く燃ゆる肉叢 志世子

メタボよりもつと恐ろし認知症 秀樹

新聞種になった善行 アンズ

ナオ舟宿へ帰りを急ぐ雪見船 恭子

すっぱん雑炊月も月なみ わこ

覗いてはいやこの布を織る間 忠史

身を細らせて貢ぐ愛なり 文

チイママの肩のタトウは黒揚羽 豊

高層ビルのドバイ浮き立つ 志

ナウ故郷へ夢は通ひぬおはら節 淳

付き添ってゆく孫の入学 町

飛行士は盛りの花を窓に見て 枝

沃土耕す平和なる国 英

## 雑の正花と似せものの花

### 二村文人

他季の花もそうだが、雑の花は私自身ついで詠んだことがない。似せものの花のような微妙なものにも近づかないようにしてきた。

しかし、それは無理からぬところがあつて、私たちがお手本にしている芭蕉の連句、少なくとも俳諧七部集に雑の正花の例は全くない。雑の正花や似せものの花がいつごろから意識され、どのように式目が定められてきたのかを明らかにするには、連歌の時代までさかのぼらなければならぬが、にわかにはその用意もないので、雑の正花が詠まれた例をいくつか紹介して、実作の参考に供したいと思う。

雑の正花は、本誌の先号に再録された東先生の「正花覚書」にあがつているが、それはほぼ「正花論」(『華たんす』所収、白牛編・蓼太補、宝曆十二・一七六二)によつてゐる。蓼太は江戸中期の俳人で、中興期の江戸俳壇を代表する人物である。「正花論」では、春の正花に続いて、他季の正花として余花・若葉の花・花に時鳥・花火・花相撲・花燈籠・かへり花・餅花をあげた後に、「右の外に他季の正花古き俳書になし。しかる所、近年

夏冬の文字を入れ、又は強き他の季の言葉を加へ、他の季の花のとて、作者の手柄とし、更に花の本意を失ふとやいふべき。其故は秋の字を加へて正花に成りがたきに於てしるべし」とあるところから、正花についての規範を示そうとしてゐるようである。

また、雑の正花の後には、「右二十一品いづれも植物に二句去りなり。雑の一字を添へたるは、花前に至て夏冬の季出たる時、花を付る用と知るべし」とあり、どのような場面で雑の花が必要とされたのがわかる。更に「されど跡の附句に春季をゆるさざらば、例に花をおもんじたる蕉門の捌きなり。是等を新古の差別といふべし」とあるのは、夏や冬の花前に雑の花を付けたとき、その次を春にしてはいけないということなのだろう。

ちなみに、支考が芭蕉に仮託して書いたと見られている『二十五箇条』(享保二十一・一七三六)には、「世に花といふは、桜の事なりといふ人も有れど、花とは万物の心の花なり。たとへば花聲・はな姫の類、茶の出ばな、染もののはなやかなるも、そのものくゝの正花なれば、花と賞翫の二字にさだまりぬ。いづれのはなにも春の季にして、植物に三句去べし」とあり、以下に示す例もほとんど雑の花前に雑の花を付け、その後を春を二句

続けて春三句という形にしている。

次に紹介するのは蕪村周辺の嘯山・太祇・随古の三吟による『平安二十歌仙』(明和六・一七六九)に載るものである。

鼻の高さも地頭成けり

雑

僧堂に藪買付て花紅葉

雑

光りしづかに古きとほし火

雑

(『平安二十歌仙』第二)

裏の花の定座。「花紅葉」は春の花と秋の紅葉で、「正花論」には「惣じて両季かねたる物は雑なり。互ひに重き景物なればなり」とある。

明石潟武備花やかに城建て

雑

淋しき月や正月の旅

春

先くゝの餅かびかるた碁双六

春

(同第二)

裏の九句目に花を引き上げ、こぼした月を短句の春で付けている。「正花論」では、「花やかとは榮の字を書く論あれども、花やかと称美したる詞なれば、蕉門下花やかと書て正花に用ゆ」と言っている。

花代を其妹にさえ渡すらし

雑

秋の下りを契り行春

春

鶯の声に隠る、月星に

春

(同第十七)

裏の九句目に花を引き上げ、花の定座を春



の月になっている。「花代」は遊女に与える祝儀で恋句。付句は秋に下る約束をして別れて行く春の意で、これも恋である。

次に、蕪村が一座している連句を取り上げる。

押込て腕の出かねる花うつば

雑

死んだ鵝の塵にはかる、

雑

あか桶に片袖うつる水かみ

雑

(歌仙「枯てだに」の巻)

名残の裏の折立に花を引き上げ、花の定座と拵句は夏にしている。「花うつば」は、「正花論」によれば、「花真壺」(花の絵のある壺)

と同じで、花を挿したうつば(鞆。矢を入れる容器)のこと。「あか桶」は關伽桶で、仏に供える水を入れる桶。

花嫁と和子が成りし歎ても扱も

雑

そなたの空や春の行方

春

かゝる野にとがしきは雉子の声

春

(歌仙「木のはしの」の巻)

裏の花の定座。花前が「相傘ねたき仇書のおさま」という恋句なので、恋の花の句になっている。折端は蕪村。

有合せたる有明の月

秋

猿叫ぶ秋の山辺を花朝

秋

我住里は柿のみぢば

秋

(歌仙「陽炎の」の巻)

裏の花の定座。花前に月を出して、秋三句にしている。

正使より副使の文の花やかに

雑

矢剥の橋や水ぬるむころ

春

春雨も海老にるほどよ三日の影

春

(歌仙「朧月」の巻)

裏の九句目に花を引き上げている。「海老にる」は酒肴の用意で、「三日の影」は月を詠んでいると思われる。

春花秋の月よき此峯を

雑

金の貢汗に肩かす

雑

御礼なれや古ききつねもなかりけり

雑

裏の九句目。付句は夏とも雑とも取れる。

(歌仙「春や」の巻)

立春在臘花智の持参

冬

屁負婆々恋も少しはこき交せて

雑

京なら只は置かぬ此芝

雑

(歌仙「罷出た」の巻)

裏の花前に年内立春の花を出している。「屁負婆々」は「科負ひ比丘尼」と同じで、花嫁の付き添い。前の二句は蕪村。

月をかさねしはつ春の餅

春

花むこも雪中庵の三つ物に

春

小舟つけたるむめの片町

春

(歌仙「君と我」の巻)

裏の花の定座。花の句は歳旦三つ物で春か。

蓼太との両吟だが、それぞれが続けて数句付けており、やや変則である。花の句と折端は蕪村。蓼太は雪中庵三世。

(付記)

具体例をあげて恐縮だが、本誌の先号に掲載された「左衽の漢」の巻で、裏の五句目に「大陸に火花を散らす商社員」とあり、枝折の花が「数多なる軍書に哀し山桜」となっているのは、「火花」を正花と見たからではないかと思われる。しかし、「火花」は似せものの花(非正花)なので、裏の花が詠まれていないことになってしまう。この場合、「火花」をどのように扱うかが問題になるが、例えば『応安新式』のような連歌の式目書では、実物同士が折を嫌う場合、実物と似せものは面を嫌うとされているので、花の定座のある初裏に「火花」を出すのは難しいのではないかとと思われる。ただし、似せものの花は、本来の意味から離れて比喩的に用いられるものだが、ここは火花そのものでもなく、更に比喩的に使われているので、もう少し緩やかに考えてよいのかもしれない。

なお、雑の正花と似せものの花は、『十七季』の付録の「正花一覽表」にもあり、難解なものについては注釈がある。

## むらさきの夢の一日

—正式俳諧興行を見学して—

奥野美友紀

初春のある日、鈴木千恵子さんから正式俳諧のご案内をいただいた。亀戸天神社で行われる藤祭りの興行で、執筆を務められるという。千恵子さんは同学の先輩かつ友人で、私を初めて連句の場へ誘って下さった人である。昨年の秋、十四年ぶりに連句再入門となり、年明けには文音も初体験、連句というものをもっと知りたいと思っていたところだったので、喜んで見学させていただくことにした。初心者気楽さもあり、気分は物見遊山だったのだが、折角だからと付句を出す役のひとりに加えていただくことになった。

四月二十三日、朝早く家を出るとあたりは真っ白だった。霞がかかっていた。私の住む富山には珍しい。しかし春らしい景色が、藤祭に向かう朝にはふさわしいではないか。藤をまとった春山霞壮夫（はるやまのかずみおとこ）のことなど思い出されて。もつとも、この霞のせいで列車のダイヤは乱れ、東京到着も一時間遅れることになってしまったのだけれど。

亀戸の駅から、鳩が群れる炒り豆屋の角を曲がり、ついでにちよっと豆も買い、大通りから少し入って、亀戸天神に到着した。学生

の時分、十年以上も東京に住んでいたというのに、亀戸も、亀戸天神も今日が初めてである。

まず玉垣越しに藤の花が迎えてくれた。人に混じって池に渡された橋を渡りながら、日の前の風景を箱庭というのかと思う。池の様子といいその上に架かって境内が一望できる橋といい、とてもこぢんまりとしている。満開の藤の花の房が、境内のしつらいを覆い隠してしまうようだ。もともと小づくりないろいろが、群れて咲く花に圧倒されてさらに小さく見える。大通りとは異なるスケールの中に置かれて、橋を渡りながらガリバーの気分になる。「江戸」の名所を物見遊山だ。藤の房は、以前はもつと長く長く垂れていたのだと後で伝え聞いた。

手水で清めて拜殿に向かうと、中でお祓いを受ける人々の姿が見えた。和装と洋装と、もしかして猫糞の方々だろうか、と思いつつさらに目を凝らすと、やはり先輩である二村文人さんの後ろ姿があった。受付を済ませて会場に入る。悠々とお参りしていたが、実は開始時間は迫ってきていたのだ（後で思えば）。勤められるままに奥の方の席に着いた。

正面には「天神さん」、菅原道真公を描いた軸が掛けられている。この軸に描かれた天神さん（と、あえて呼ぶ）が、私には少し変

わった様子に見えた。富山では、初めて男子が生まれると、妻の実家から天神さんを描いた掛軸または木彫を贈る風習がある。浪化上人ゆかりの瑞泉寺（南砺市。旧・井波町）あたりを始めとする県の西部では、木彫の天神像が好まれるらしい。一方、私生まれ育った富山市周辺では掛軸が一般的で、正月、家々の床の間に天神さんの軸が掛けられる。そのようなわけで天神さんの掛軸には親しみを持つているのだが、今回掛けられていたのは、彩色された絵ではなく、墨一色の、しかも線描だった。見慣れた、彩色された絵とはなつて、まず印象に残る。

そして正式俳諧興行が始まった。天神さんを背に、宗匠・脇宗匠・副宗匠・老長が並ばれる。配硯のお二方が、硯を捧げ持ち、正面に向かって進み、定められた場所に硯を置いてゆく。シンメトリー（左右対称）な動きを面白く拝見する。花が活けられ、準備が整い、宗匠が「執筆、執筆」と呼ぶ声があった。呼び出しに応じて、鶉色の色無地に紺色の袴を身につけた執筆が、文台を捧げてしつと進んで行った。文台捌きである。

執筆の前に、硯箱・筆・水引・懐紙といった品々が並んでいる。特に印象に残ったのは執筆の、懐紙に錐で穴をあける動作、そして「歌膝」の姿である。筆を持ち、片方の膝を立てて座る姿は、正座に慣れた目には独特の

ものに映る。

所作を実際に見ると、連句の場で、執筆という役がいかに大きな役割を担っているかがよくわかる。執筆は、文字通り筆を執り記録する役だが、一巻の連句の進行を实际的に担う。治定は宗匠を始めとする人々によるが、興行の中心となる部分の流れは、この座全体といわば「手」となる執筆により導かれるといつてよい。一座の中で執筆だけが歌を興する姿で座っていることにも、象徴的かつ特別な意味を感じた。

二十韻の、発句・脇・第三の句が読み上げられる。名残の表に移ってから二座から人が出て短冊を出すことになっていた。私はその二番目であるから、早い方だ。ウキサザ（右起左座）、ウキサザ、とそればかりが気になる。目の前に行く人々の立ち居振る舞い、それも足の運びを注視しつつ、「マスキメロンの網は密なり」と筆ペンで清書してきた短冊を、ポケットから出したり入れたりして座っていた。そして内田遊民さんが「打水を打って老舗の門を開け」の句を持って出られた。次である。「付け！」の声も、裏返らずに言えたとと思う。「ウキサザ」についても、割にうまくいったのではないか。

前に歩み出ると、執筆はにこやかに微笑んでいた。私は、肝腎の短冊を、ポケットから二つ折りのまま取り出して、執筆の、天神さ

んの目の前でシワを伸ばしていたようだ。執筆は微笑んでいたのではなくて、笑いをこらえていたらしい。

正式俳諧興行は、「俳諧」の歴史と伝統を伝える役割を担う。いま、このような儀式が継承される場はわずかに限られるが、行事の伝承が、連句という表現にある重みを加えていることは間違いない。他面、歴史と伝統という名のもとに形骸化してしまうこともおそれる。

正式俳諧は確かに形式的な性格を持つ。今回の興行でも下俳諧が準備されていたし、実作の場の実情と隔たつているといえば、そうかもしれない。しかしそもそも連歌俳諧にしても、「作品」として成るまでに、推敲や何やら、むしろあれこれ揺れ動いていたはずである。当然といえば当然なことも、書き留められてしまうともう見えない。実作にしても儀式にしても、実際に試みてこそ、洗練に至る道筋がわかるのだろう。

そしていまひとつ感じたのは、形や型というものの持つ一種のむなしさではなく、むしろ形や型があるがゆえの、連句という表現の持つ強さや確かさである。連句は、形式と規範とを前提とする。この緊張感は、平生の、和やかなうちに進められる実作の中にも共有されよう。それは、一期一会の緊張感でもある。緊張感に裏打ちされているからこそ、人

の「和」と相俟って思いがけない表現を織りなす。この連句の面白さを、改めて感じた。

続く楽しみは、酒食茶菓を共にしながらの実作である。私は、高橋豊美さん捌きの席で、市野沢弘子さん、式田恭子さん、二村文人さんらと共に一緒した。二村さんとは毎月富山で一緒しているけれど、他のお三方とは初めてである。

学生の頃、幾度か深川や柏の連句教室に出席させていただいた。その時は、連句を楽しむというよりも、勉強しなくては、という気持の方が強かったのだと思う。うやむやに、足も遠のいた。その後、今度は富山で連句に再会した。それなりの時間を経て再び出会った連句は、とても面白かった。時が流れるということは、なんと楽しいのだろう。俳諧について勉強したいなら、まず実作を経験してみるとよい——そういった意味の言葉を、かつて東明雅先生にかけていただいた。連句を楽しむことも、東先生のお言葉の意味も、少しはわかるようになったらどうか。

恭子さんの挙句「朝寝の夢は東京の夢」で私たちの巻はめでたく満尾となった。その後皆さんとお別れして、ひとり夕方の方の東京の街を歩いていたら、しぜんとまた、この挙句が思い出された。今日は遊んだなあ、と春の夢のような日の名残を、ふわふわと楽しんだ。

## 事務局便り

奥野美友紀 富山市在住

◇猫蓑基金にご協力有難うございました。

和田順子様 一万円  
源心庵の会様 二万円  
神楽坂連句会様 二万円  
大谷似智子様 五千元

浅野黍穂様 一万円  
山寺たつみ様 一万五千元

鈴木千恵子様 一万円  
匿名様 一万円

橋文字様 六千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通3376045

◇新同人

第十八回猫蓑同人会（平成二十年度）に於いて三名の方が同人に推挙されました

根津忠史  
遠藤央子  
染谷佳之

◇訃報

六月名誉会員の鈴木春山洞様が亡くなられました。謹んでご冥福をお祈り致します。

◇訂正とお詫び

前号に文字の誤りがありました。ここにお詫びして訂正致します。

一頁 中段四行 下平可都美↓可都三  
一頁 中段五行 茂木秋芳↓秋香  
一頁 中段九行 薫風俳諧↓蕉風俳諧

◇会の運営、その他についての疑問や、ご意見は、何時でも、理事、事務局にご遠慮なくお申し出下さい。

季刊 『猫蓑通信』第七十二号

発行人 猫蓑会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二一二十一十六

編集人 猫蓑通信編集部

◇猫蓑会例会

芭蕉忌正式俳諧興行及び

明雅忌追善連句会

日 平成二十年十月十五日（水曜日）

時 十一時より十七時（受付十時半より）

場所 江東区芭蕉記念館

江東区常盤一六―三

電話03-3631-1448

芭蕉忌正式俳諧終了後明雅忌追善連句会

（明雅先生の発句による脇起り二十韻）

◇正式俳諧お稽古

平成二十年九月十七日（午前午後）

於 江東区芭蕉記念館

◇着付のお稽古（特に男性の袴）

平成二十年九月九日（火）

於 江東区芭蕉記念館 二階

十時半～五時まで

ご都合のよいお時間にお出かけ下さい

お昼にかかる方はお弁当をお持ち下さい

お茶は用意致します

◇新会員紹介

飯塚國光

柏市在住

全

佐々木有子

座見

内田遊民

配視

原田千町

香元

横山わこ

花司

染谷佳之

副知司

武井雅子

執筆

生田日常義

知司

林 鐵男

協宗匠

倉本路子

宗匠

青木秀樹

協宗匠

松本 碧

老長

原田千町